

海鳴 津村節子

海鳴 津村節子

講
談
社

鳴 海



昭和四〇年一月一〇日

著 者 津村節子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電 話 東京(942) 一一一一(大代表)

振 替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定 価 三八〇円

著者・印刷所・製本所は取り替えます。

© 津村節子 昭和四〇年

海

鳴

第一章

海は、夕照に彩られていて、荒い波が、岩礁の累々と重なった海岸線に白い飛沫をあげて碎けていた。

海を見下す街道に、長い人の列があつた。その街道に、海を渡ってくる強い風が砂埃を絶えず巻き上げ、人の列はその都度かすんだ。

唐丸籠の数——五十八挺、それを担ぐ人足、護衛する役人たちを含めると三百名を越える夥しい人の列であつた。この物々しい一団は、安永七年六月、江戸を出発した無宿を佐渡金山に送る第一陣で、信州路を経て出雲崎から船で佐渡の小木港に二十日あまりを費して到着したものである。

途中五日ほど、海が荒れたために船待ちをした。比較的佐渡の海が平穏な季節を選んだのだが、それでも海などというものは見たことすらない者たちが殆どで、船が港を離れると、

まだ静まりやまぬ波のうねりにかれらは食物も喉に通らず、はらわたまで吐くかと思うほどの酔いに苦しんだ。

かれらは籠の中の柱に腰を縛られ、両手に手鎖をつけられ、膝を屈したままの姿勢で、真夏の長い道中を揺られ通して運ばれていた。夜、宿場に着いてからも、籠から出されることはなかった。首も肩も背も足も、枷をはめられたように固くしこっている。手鎖の喰い込んでいる部分の皮膚は破れ、膿みただれ、熱を持ち、腫れ上っている。はじめの頃は、軀中の痛みに堪えかねてうめく声が籠を押し並べた小屋の中に充満して、とても睡眠をとるどころではなかった。島送りは若く健康な者たちに限られているのだが、道中、衰弱のため二名が死亡した。

既に、誰も大声にわめきのしる者もいなかった。感覚も麻痺して、軀の痛みも薄れていた。

直吉は、昼も夜も幻覚を見るようになっていた。軀中が熱っぽく、脳がどろどろにとけて、頭蓋骨の中で重たく揺れ動いているようであった。思考力など、とうに失せていた。江戸を発つ前に役人から、佐渡金山の水替人足として送る、と申し渡されたが、それがどのような作業であるかということは、一緒につかまった仲間たちの言葉を総合してみても、正確

なところは何もわからない。長い道中の間、自分達の前にどんな運命が待っているのか、考えられる範囲内のことは考え尽した。警護の物々しさが、江戸を発った時から絶えず直吉を怯えさせつづけてきた。が、疲労と衰弱の為に夢うつつの状態になってからは、精神的にも肉体的にもむしろ楽になったようだった。

籠の前方には、握りめしや水などを差し入れられるだけの小さな穴があげられていて、直吉の前を揺られて行く唐丸籠の一部と、それを担ぐ人足の背の一部が、拡大されたように見え隠れしていた。

一挺の籠は人足四人掛り、それに助人足が一人ついた。人足達もかなり疲労しているらしく、暑さにあえぎ、足ももつれて籠は激しく揺れ、その都度無宿たちの軀に、縄が、手鎖が、容赦なく喰い込んだ。

直吉は目を閉じ、あぐらをかいた脚をずらして放尿した。籠の底部には排尿排便の為の穴があげられていたが、籠にも衣服にも、牛小屋の濡れた藁のむれたような臭気がしみついている。だが新しい尿の臭いは、直吉に、自分がまだ生きているのだ、という自覚を与えた。

もう、目的地は近いらしい。

兎に角そこがどのような地獄であろうとも、この籠から解放されることは有難い、と直吉

はかすかな希望を抱くのだった。

一行が中山峠にさしかかったとき、不意に籠が土の上に荒々しく下された。あと一息で長い旅は終るというので、人足たちの労をねぎらい、囚人たちの疲れをいたわる為に、峠の茶屋で甘酒を一ぱいずつふるまわれることになったのである。喜びのどよめきが起った。手鎖のこすれ合う音が鳴り、籠の口から痩せ衰えた手がきのこのように生え、甘酒の椀を震えながらかかえ込んだ。

直吉はその椀を口にしたとき、ふと不吉な思いに襲われた。刑場にひかれて行く犯罪人が、途中警護の役人の情で所望の物を食べさせて貰うしきたりを思い出したのである。何の罪咎もなく、ただ無宿者であるというだけでとらえられた自分は、やがて許されて帰れる日もあるかと思いつつも、この甘酒の一ぱいはこの世との訣別になるのではないかという思いに胸を突かれたのだ。直吉は椀を手にしたまま、その不吉な想像をふりはらうように首を振った。

一行が相川の町にはいつてくると、町の人々はその仰々しい護衛ぶりに度胆を抜かれた。女子供はみな家の中に閉じ籠り、商家は板戸をとぎしてわずかな隙間から、長い道中に汚れ切った五十八挺の籠が目の前を一挺ずつ通り過ぎて行くのを見つめていた。

籠は琉球座で包んであり、内部をのぞき見る事はできなかったが、その為一層人々の恐怖は高じ、凶悪犯を迎え入れたような怯えにふるえていた。

幕府が、流罪人でもない無宿たちの護送に唐丸籠を用いたのは、腰縄で歩かせるよりも逃亡の危険が少いこと、監視の役人がわずかの人数でこと足りたためによる。それに、籠を担ぐ人足たちは街道筋の各村から差し出させたから、実際の費用は最小限に節減することができたわけである。

人足の調達ばかりでなく、宰領者の送迎、止宿中の警護、大人数の一団の接待費はすべて沿道の村々の負担になり、無宿が送られた道すじは、颯風が吹き荒れたあとの如くさびれ、しばらくは草も生えぬと言われるほどであった。

やがて一行は、矢来を組んだ南沢村の水替小屋の前に到着した。

着いた――

直吉は、いよいよ籠から出される期待と恐れで、籠の外を透し見た。その時、凄じい掛声と物を叩きつけるような音が同時に起り、列の前の方から、人間の声とも思えぬ奇怪な叫びが上った。視界のきかぬ直吉は、何が行われているのか想像もつかず、軀を固く縮めていた。が、その掛声と叫びは徐々に近づき、人影が射した瞬間、いきなりばさりと音がして籠

が激しく揺れ、頭上から顔面をかすって巨大な刃物が落ちてきた。直吉は、一瞬心臓の鼓動が停止し、蒼白になった。腰縄が柱から断ち切られて達磨のように転がり出ると、ようやく全身の緊張がとけ、と同時に夥しい汗がふき上がった。直吉は土の上に這ったまま、大柄な男が大まさかりを振って唐丸籠を叩き割って行くのを目にした。

籠から出されても、土の上に這い出した無宿たちは、手足をふるわせながら誰も立ち上ろうとする者はいない。長い道中、三尺の籠に押し込められていたため、足腰が萎えたようになっいて自由にならなかった。かれらはその場にうずくまったまま、次のような心得を、足を踏ん張ったように開いている若い役人から申し渡された。

一ツ お前たちは佐渡金山の水替のため送られて来たものである。そのつもりで当分は

中尾間歩に於て水替を行う。

一ツ 水替小屋を住居とするが、人数は半分に分け、一昼夜交代で坑内に入る。入坑の

際は、中尾間歩番所で検査を受け、翌日出坑して小屋へ帰るときも同様検査を受ける。小屋の出入りの際は間山口番所詰町同心が見届ける。

一ツ 作業には格別精を出し、心を改めたものは江戸へ帰すつもりであるからそのつも

りで働き、もし不埒な行為あれば処罰する。

一ツ 坑内出入りの外はいいきい外出は許さぬ。逃亡したものは見つけ次第死罪にする。

一ツ 飯米や小遣錢、着類などは公儀より支給される。

役人が去ると、無宿たちは手鎖をはずされ、家畜のように棍棒で追いたてられて小屋の中によろめき入った。屈強な体軀をした差配人が、一カ所しかない出入口の前に立ちはだかり、今日より十日間の休息を与えるから有難く思え、と言いつ残して去ると、外から重々しく門のかかる音がした。

直吉は、小屋の隅に呆然と横たわっていた。水替作業をすると言いつ渡されても、具体的な説明はなにもなかった。若くて健康な者たちのみ選ばれているところから、その作業が過激な労働であろうことは察しがつく。十日間の休息は、長い道中衰弱し切つて使い物にならなくなっているかれらには是非共必要なものであるのだろう。有難く思え、と言われても、かえつて直吉は長い休息を必要とする労働に対する不安をつのらせた。

やがて出入口が開いて、めしと味噌汁の桶が運び込まれてきた。直吉は食欲がなく、盛相もつさう

に山盛りに盛られためしを二口ほど食べただけで残してしまった。

「食えねえのか。水替がはじまれば、一日一升二合の米がいただけるようになるが、それでも足りなくなるのだ」

下世話人が薄い笑いを浮べ、直吉を見下しながら言った。

めしがすむと、もうすることは何もなかった。小屋内は通気が悪く、五十八人の男たちの人いきれでむせ返っていた。

逃亡した者は見つけ次第死罪にしようが、小屋の外には嚴重な矢来が組まれている。

小屋の見廻りは小屋頭が頻繁に行い、たとえ小屋を脱出することができたとしても、要所要所には番所があり、昼夜見張りが立っているという。その上佐渡は四方が海、百姓の子として生れた直吉は、生れてはじめて唐丸籠に入れられて海というものを渡ったのだ。泳ぐことはおろか、船を漕ぐすべも知らずに、どうして島の外へ逃れることができよう。

仰向きに寝ていると、太い格子のはまった窓から、漆黒の夜の色がのぞき見えた。星のないう蒸暑い夜であった。幾日ぶりで見る夜空であろう。故郷をあとに、ひとり江戸へ出て来たときは、食物もなく、屋根の下に寝ることもできなかったが、降るような星の下にのびのびと手足をのばす自由があった。だが、あの自由は遠い夢になってしまった。自分がこうして

海を渡り、金山の水替として送られてきているとは、年老いた両親はじめ肉親たちも夢にも思うまい。故郷へ帰るところか、自分の身に降りかかった境涯を報せてやるすべもないのであった。

直吉は川越の生れで、貧農の次男であった。妹たちは遊廓に売られたり、子守りに出されたりしていた。だが、直吉の下にはまだ幼い弟たちが残っていて、年貢米を納めてしまうと家族は芋殻のはいた粥をすするのがやっとという有様であった。兄の音吉は好きな娘がいるのだが、到底嫁を迎えられる状態ではなかった。働き手がふえても、耕す土地がないのだ。食いつ持が一人分ふえることの方が恐しかった。兄はそのせいか始終苛ら立っていて、貧困と重労働のために年より遙かに老け込んでしまった両親を口ぎたなくののしかったり、又、陰鬱にふさぎ込んで家族の者たちと何日も口をきかなかったりした。

直吉が家を出たのはただ口減らしのためであって、全く何の目当てもなかったわけではなかった。女に生れたばかりに、十歳にもならぬうちから痩せた背に赤ん坊をくくりつけられて子守り奉公している妹や、十五になったばかりで客をとっているという妹たちのことを思えば、男の自分がのめのめと家に残ってわずかな食物をあさり食わねばならぬ生活にしがみ

ついているのは間違っている、と思ったのである。直吉は、柄が大きいので年より老けて見えたが、まだ十八歳であった。

江戸は、人別帳からはずされたならず者や、職を求めてうろつく浮浪者があふれていた。江戸へ出て来たからといって、おいそれと職は見つからなかった。身許保証人のない者は職につけないどころか、無宿人を宿泊させることも禁止されていた。

幕府は、それらの無宿たちを狩り集めては佃島や石川島の人足寄場に収容し、それぞれ適当な手業を習わせて放還するか、離農してきた農民に必要な農具を与えて帰農をすすめるというような政策もとっていた。しかしうち続く飢饉や旱魃、風水害、伝染病などにより生業を失った無宿たちの数は増える一方で、それらの中には貧困の為悪事を働く者も多く、江戸の治安は乱れる一方であったのだ。

この夥しい無宿たちに手をやき、江戸の治安と無宿の矯正、天領である佐渡の鉾山人足の調達費用節減という口実をもうけ、無宿たちの島送りを決行したのは、勘定奉行石谷淡路守であった。

佐渡奉行依田十郎兵衛は、江戸で持てあましている者たちを貰い下げても監督に困るし、鉾山の風紀上も面白くないと強硬に反対をとなえたが、淡路守は意を翻そうとはしなかつ

た。やむなく依田奉行は、貰い下げる無宿を四十歳迄の健康な者で、前料のない者、という条件を出した。坑内の作業のうち、大工（坑夫）や穿子（はうこ荷揚げ、運搬などの雑役夫）のように技術や経験のある仕事には使用できないので、坑内の湧水を汲み上げる水替作業に使用することにしたのである。過激な労働ではあるが、健康で体力さえあれば、その日から直ちに作業に従事させることができるのだ。直吉ばかりでなく、多くの若く健康な無罪無宿が島送りになった由縁である。

直吉は、江戸へ出て来たものの、仕事もなく泊めてくれる宿もなく、河原の橋の下にむしろをかぶって寝ていたところを、町同心の手先に番所へ引立てられた。やはり、いわれもわからず連れて来られた無宿人たちと一しょに仮牢に数日とめ置かれ、そのまま島送りになったのである。直吉は、無宿狩りのことについては何も知らなかったから、いきなり橋の下から引立てられたときも、自分は何も身におぼえはないと叫びつづけ、番所で一応の身許調査を受けたときも、なぜ自分がこうした扱いを受けねばならないのか、と訴えつづけた。佐渡金山に送られるのは無罪無宿が条件であるとは知る筈もなかったのだ。

若く血氣盛りの者たちは、体力の回復も早かった。仲間うちには、賭博や盗みを働いた入

墨者もまじっていて、退屈凌ぎに手製のさいころで手なぐさみをはじめめる者もいる。くよくよしてもなるようにしかならぬとあきらめた風の者、自暴自棄になって騒いでいる者もあった。だが直吉は、なぜ自分がこうした不当な扱いを受けねばならないのか、どうしても納得がいかないのであった。

「やい、そんなに考え込んでばかりいちゃ、軀がまいってしまうぜ。病氣だからといって、仕事を加減してくれるようなところじゃなさそうだ。自分の軀は自分で気をつけるよりしうがねえんだからな。そんないい軀をしていて、めしが食えねえはずはねえだろうに」

青い顔をして、部屋の隅に膝をかかえ、終日黙りこくってめしも殆ど手をつけぬ直吉に声をかけたのは、二十五六に見える品川無宿の新八という男だった。

「おれは、無罪だ。それなのに、なんでこんな目にあうんだ」

直吉は、目に涙をためて新八に喰ってかかるように言った。

「おまえばかりじゃねえや。おれだってほかの奴らだって、博奕や盗みぐれえの前科はあっても、島送りになるような重い罪はおかしちゃいねえ。つまり、おれたちは、江戸の町から厄介ばらいをくったのさ。ひよっとすると一生けんねえ仕組になっているかもしれねえ」
「なんだって」